

太田に光をあたえた先人たち



太田市教育委員会

医学界のリーダー

銀行界でも活躍

群馬県議会議長をつとめた



第10代 本島自柳（綾三郎）

本島 自柳（綾三郎）

太田で一番古 太田市西本町三一八に「本島総合病院」

いお医者さん がある。本島病院は江戸時代前半の承

応三年（一六五四）十二月に没した「本島数馬」を初

代とし、現院長の第十三代本島悌司まで約四〇〇年間

にわたり太田で病院を開いてきた古い歴史を持つ。第

四代目から「自柳」を名乗り、以後代々「自柳」を襲

名してきた（ただし、第十一代の柳之助は自柳襲名を

きらったため、本名でとおした）。

江戸時代初めに町医者として開業したこの病院は、

明治以後も個人医院として町の人々の健康維持と病氣

の治療に力を尽くしてきたが、昭和十六年に「病院」

になり、同二十七年には「医療法人」、同四十年「特

定医療法人」となり、平成元年には「総合病院」と称

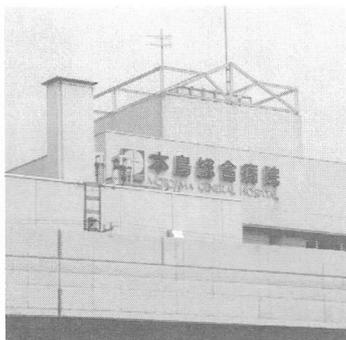
することが認可されて、病院の仕組みが一段と拡大し

てきた。平成十三年現在、本島総合病院は三六五のべ

ッドと二五の診療科目を持つ大病院に発展した。

診療科目

内科
神経内科
呼吸器科
消化器科
循環器科
アレルギー科
リウマチ科
小児科
外科
整形外科
形成外科
脳神経外科
呼吸器外科
心臓血管外科
皮膚科
泌尿器科
肛門科
産科
婦人科
眼科
耳鼻咽喉科
リハビリテーション科
歯科口腔外科
放射線科
麻酔科



本島病院風景（南側）

学校の先生志望 本島家第十代、自柳襲名第七代にあ

から医者之道へ たる当主は、慶応三年（一八六七）

六月二十日、武蔵国北埼玉郡今井村（埼玉県熊谷市）

の栗原友右衛門の三男として生まれ、幼名は栗原綾三

郎といった。

綾三郎は熊谷中学校（熊谷高校）を出て埼玉師範学

校へ進学し、学校の先生になろうと勉学に励んだ。教

育という尊い仕事が自分の生き方にぴったりだと思っ

たからであった。明治十八年（一八八五）三月、一九

歳で同校を卒業し、教職の道を歩もうとしていた。

ところが、知人の紹介もあつて本島家に入入りして

いる間に、先代の本島自柳（本名英之助、晩年は柳翁
と名のる）に見込まれ、医学を修行することになった。

翌十九年春、綾三郎が二〇歳の時、語学と医学の勉

強をするため東京に出た。優れた能力と負けん気の綾

三郎は寝る間も惜しんで真剣に勉学に励んだ。やがて、

同十九年の暮れ頃、綾三郎は柳翁の長女「乙女」と結

婚して本島家の第十代目を継ぐことになった。

三か年の研究と実習が実つて、明治二十一年（一八

八八）十一月、当時の内務省が行った「医術開業後期

試験」に見事合格し、翌十二月医者として登録された。

時に二二歳であつたが、綾三郎はこの後しばらくの間

振る舞いをする、きびしく叱られたものです。

当時、本島医院ではトラさんという人力車引きを雇って、『トラさん、行くよ』と声をかけて気がるに往診にでかけたものです。『困っている人からは診察代をもらうな』が信念であつたようです。』

医師としつけには厳しいが、弱い立場の病人や生活が苦しい人びとにはやさしい心で接したようである。

群馬県議会議長に 名医としての医師と温かい人柄となり、県政に貢献 新田・太田地方の人々の尊敬と信用を集めた。地元太田の人びとの応援を得て、自柳(綾三郎)は明治三十四年(一九〇一)四月、三五歳の若さで「太田町町会議員」に当選、同三十六年十月には「新田郡会議員」にも当選し以後大正初年まで三期二年の間勤め、この間に郡会議長にもあげられた。

大正四年(一九一五)九月、四八歳の自柳は群馬県議会議員選挙に出馬、宝泉の赤石武一郎とともに初め

て当選し、以後三期一二年の間、群馬県政の重い仕事をこなした。この間の大正八年には五二歳で「群馬県議会議長」の要職に選任されて、県政の充実と発展のために腕を振るつた。その後は「県参事会員」に任命され県知事を助け、県民のための仕事を推し進めた。

議員生活の多忙の中、自柳は明治三十六年四月に「新田郡医師会長」に選ばれ(三七歳)、大正七年(一九一八)四月には「群馬県医師会副会長」「群馬県学校医会副会長」に選ばれ(五一歳)、あわせて「群馬県医師会選出日本医師会代議員」にもなり、県医学界の中心人物・リーダーとして活躍した。

銀行の取締 大正十年(一九二一)から昭和十四年(一九三九)頃までの一八年間、太田の経済界の大家、葉住利藏・澁澤金藏・大島戸一らと手を結び、金融界(銀行関係)でも活躍した。

「新田銀行」と後の「上毛実業銀行」は大正十年七

月から昭和三年六月まで、「群馬大同銀行」(後の「群馬銀行」)は昭和七年十二月から同十四年頃まで、それぞれの取締役、「群馬県農工銀行」は昭和三年九月から同十四年頃まで取締役などに推された。このように、自柳は昭和十四年の七三歳の頃まで、お医者さんの仕事のほかに、金融・経済界でも力を尽くした。

なお、昭和十四年には「司法保護常務委員」にも選ばれて、兼任することになった。

胃ガンのため 昭和十七年(一九四二)春、働き続け七七歳で病没 た自柳は胃ガンを発病した。同年十月中旬、ガンの手術が行われ、いったんはよくなるかに見えた。しかし、病気はよくなるらず、医師や看護婦の必死の看護・治療にもかかわらず、翌十八年(一九四三)十二月二十七日、胃ガンのため病没した。享年七七歳。墓は本町の東光寺にある。幼名は綾三郎、号は撫一庵と称した。

子孫も医学・自柳(綾三郎)は医学界・県政界・地経済界で活躍 元金融界の有力者として活躍し、世のため人のために尽くした功績は高く評価されている。自柳のきびしいが温かい人柄と誠実な生き方は、地元太田はもとより県下一帯の人びとの仰ぎみるどころであつた。

自柳(綾三郎)の先代で義父の「本島柳翁」(幼名英之助)は、本島家第九代、天保十一年(一八四〇)生まれで大正十三年(一九二四)に八四歳で亡くなった。明治維新のころには家業に従う傍ら、新田(岩松満次郎俊純らと新田勤王党(新田官軍)を結成して岩倉具定にしたがって活躍した。また太田中学校(太田高校)の設立・開校にも尽力し、初代の同校校医となつた。

自柳(綾三郎)の長女「竹子」は新潟医科大学学長を務めた本島一郎の夫人となつた。

長男の「柳之助」は東京医科大学（東京医科大

学）卒業の医学博士、放射線医学の先駆者として知ら

れる。本島家第十一代目の当主だが自柳襲名を嫌い本

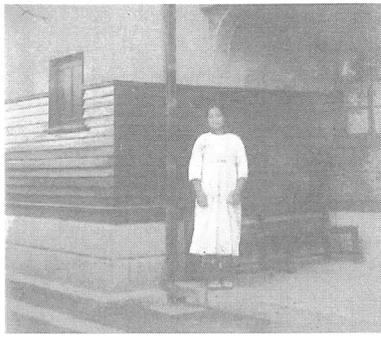
名の「柳之助」を通し「太田の殿様」といわれた。

二男は「進」で、東京電力の社員となり、幹部に昇

進、その長男は永く太田商工会議所会頭を務めた本島

虎太である。末っ子の「五郎」は橋本家の養子となつ

て医師の道を進んだ。



昭和初期の玄関と看護婦さん



現在の本島総合病院全景

本島自柳（綾三郎）略歴

昭和	一八	一九四三	二月二十七日、胃ガンで死去 七七歳
	一〇	一九二二	新田銀行取締役となる
	七	一九一八	県医師会の副会長となる
			同八年、県会議長に推される
大正	四	一九一五	群馬県議員に当選 三期一二年在職、
	三四	一九〇一	三五歳で太田町会議員に当選
	二六	一八九三	三月、太田町六丁目の現在地に帰り、父とともに医業に専念する
	二二	一八八八	一月、「医術開業後期試験」に合格
明治	一八	一八八五	埼玉師範学校卒業 本島医院で医学修業に励むことになる 暮れ頃、柳翁の長女乙女と結婚
慶応	三	一八六七	六月二〇日、熊谷市今井の栗原友右衛門の三男として生まれた